

## 空海と現代中国の仏教

静 慈圓

はじめに

私は静慈圓しずかじえんといます。愛知大学人文社会学研究所で企画しております「東アジアにおける異文化理解と受容の諸相」という公開講座のなかで、「空海と現代中国の仏教」という題で、参加させていただきます。

私の話は、大きくは三つに分けて話をしようと思っております。一つは、「現代中国と空海」、第二は、「現代中国の仏教」というお話。第三は、「現代中国と密教」というお話、この三つのお話を致します。

まず私と空海（七七四〇〜八三五）の関係ですが、私は一八歳で高野山大学へ入学しました。高野山は、空海が開いたお山ですから、高野山大学で空海の学問をしました。既に、五〇年たちましたが、空海を中心に研究して、現在は七七歳になっています。

まずは空海とは、ということ、ちょっとお話し致します。皆さんは、平安時代には、最澄、空海という僧侶がいたということは、お聞きになっていると思います。最澄は伝教大師最澄といえますね。空海は弘法大師空海といえます。それは、大師号というのがあり、空海は六二年のご生涯でしたが、亡くなってから八六年後に、弘法大師という大師号を醍醐天皇からいただきました。だから、われわれは「弘法大師空海」といいます。最澄僧正も没後四四年に伝教大師という大師号をいただいておりますので「伝教大師最澄」といいます。

空海は一二〇〇年まえの僧侶ですが、ここでは強いて「現代中国」と致しました。それは過去の話しとして終わるのではなく、日本と中国の歴史の関係を、今少し長い時間で考え、その中でその文化の理解と受容を現代の目で見つめたく考えるからです。

## 一 現代中国と空海

### 空海の入唐道を作る

空海の学問をしてきて、私はまず空海六二年のご生涯で何が一番大事かということに思っていました。そして気が付いたのは、六二年のご生涯において、空海で一番大事なのは、三一歳に空海が中国留学（八〇四～八〇六）をしたことです。当時は唐時代ですから、空海が入唐したということですね。それが空海を空海たらしめたこと、つまり空海が、日本歴史の中で、「弘法大師空海」として現代も信仰されている基となっている、そう思っていました。

しかしながら、空海は入唐をしたのに、空海以後一一八〇年の間、誰も空海が入唐したその道を辿った人がいないのです。私は非常に不思議に思っていました。私は、入唐こそ空海を空海たらしめたものと思っておりますので、その入唐の道を再現しようと思っております。その機会が来たのです。

空海は六二歳で高野山でなくなりました。以後空海の法事は五〇年に一度ありますが、五〇年に一度の法事で一一五〇年目の法事「御遠忌ごおんきといひます」が来ました。三六年前（一九八四年）でした。私は、「空海・長安への道」と題して、この計画を、高野山の金剛峯寺と高野山大学に出しました。この計画の地図をつくるのに、二年ぐらいか

かりましたが、その地図を中国北京の仏教協会にたびたび行って申請しました。しかし計画は進みませんでした。

だが「空海の入唐道を辿る」企画が急に通るようになったのです。なぜかといいますと、日本では、当時中曽根康弘首相が総理大臣でした。高野山側から中曽根総理にこの計画を話しました。当時は、盛んに「日中友好」と言っていました。日本と中国の関係の友好として、これは大事であると、中曽根総理から中国の当時の胡耀邦こようほう総書記に伝わりました。両者ともに「空海は、一宗団を創設した長ではなく、日本と中国の文化の掛け橋をした人である。だから政治に係わるのは当然である」とのことでした。つまり政府レベルの一番上のほうで、通じたのです。

空海の入唐ルートは、記録がないので詳しくはわかりません。わずかな記録を辿ると次の如くなります。三一歳（八〇四年）五月二二日大阪の難波から出発、七月六日九州五島列島の福江島を出立します。当時の遣唐使と言えれば四船、四つの船で行きますが、その第一船に遣唐大使と共に空海は乗っていました。第二船には、最澄が乗っていました。

日本の最西端九州五島列島福江島を離れると海ばかり、すぐに暴風雨に遭います。現代の明州あたりに着くのが普通でしたが、第一船は暴風雨でどんどん流されて、三四日間漂流し、八月一〇日台湾の近くかほの、福建省の霞浦赤岸に漂着します。

そこで、遣唐使一行は日本の代表だと主張しますが、赤岸は田舎であり全く要領を得ません。ともかく船体の破損を直し、赤岸より南へ海路を移動、政府機関がある福州市馬尾港に移動します。一〇月三日着。ここでも遣唐大使藤原葛野麻呂つるのまろが文章を書いても伝わらない。大使は空海にたのみ、空海が大使に代わって文章を書きます。その文章が残っております。空海が書いた文章によって、遣唐使一行が日本の代表であることが伝わります。そして、遣唐大使一行三四人だけの許可がなつて、当時の長安現代の西安に出発（十一月三日）します。

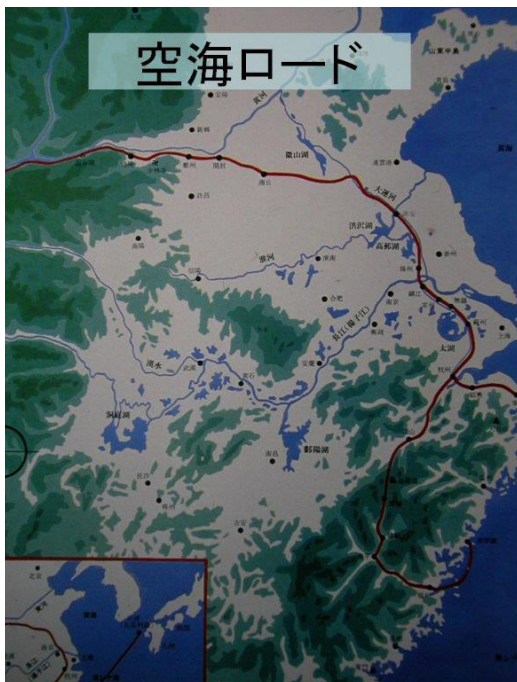


写真001 空海ロード

だから私は、福州の霞浦赤岸から長安（西安）までの八〇四年の地図をつくりました。それが二四〇〇キロありました。空海等は二四〇〇キロを、当時行ったわけですね。私はその地図のとおり行けることになりました。つまり、日中友好ということ、中曽根総理と胡耀邦総書記には非常にお世話になったのです。

私の地図を見ますと（写真001）、二四〇〇キロの南のほうの三分の一は、当時は未開放地区であったので、外国人が入っておりません。外国人を見た人もいないわけです。もちろん日本人も、空海以後私ら五人が初めてです。だから、面白い珍プレイがありました但未開放地区も全部踏破しました。

幸いといえますか、胡耀邦総書記が、その未開放地区の地域の人たちに命令してくれたわけです。上からの命令ですから、中国のことですので、地方の研究者たちが、空海とは何か、遣唐使とは何かということを、勉強して私たちを迎えてくれたのです。だから、私たちの目的が達せられたのです。一九八四年の事です。

第一回目の二四〇〇キロの踏破以後、私は、今日まで三七年間毎年、この道を精査してきました。二四〇〇キロを三つに区分し、春と秋には日本の空海信徒と共に巡礼をしてきました。したがってこの道の政治家、文化人、僧侶等とは、実に親しい友達になりました。二〇〇四年私はこの巡礼道を「空海ロード」と命名し、三つの区分にしました。「南方コース」、「運河コース」、「古都コース」と名づけました。

次に「空海ロード」を紹介いたします。ここに記した寺院名は、空海と関係があると思われる寺、また関係性において新しく出来た場所です。

## 空海ロード（南方コース）

霞浦（赤岸鎮）↓福州↓南平↓建瓯↓浦城↓仙霞嶺↓杭州↓

### ◆赤岸

一九八四年三月二日、私たち真言宗僧五名が、空海の漂着地赤岸の砂浜に立ちました。空海が遣唐大使藤原葛野麻呂と共に、三十四日間波上に漂い、九死に一生を得て八月十日、福州長溪県赤岸鎮の已南海口に漂着したその場所です（写真002）。空海以後一一八〇年もの間、この浜に来た日本僧は誰もいません。実に空海以後始めてのことです。遠く日本の高野山へ向かって、これから西安まで師のあとを踏破する覚悟を報告しました。私たち五人は感激のあまり目頭が熱くなりました。

ここは、東海（東シナ海）から卵型に入った湾で、福寧湾と呼ばれています。その湾のつきあたりに赤岸村がありました。遣唐使船は二十四メートルほどの



写真002 赤岸鎮濱





写真003 空海大師記念堂



写真004 建善寺

船であります。私たちは同じような小船で福寧湾をまわりました。空海と同じ視座で、空海が初めて見た中国の大地を見たのです。船上で涙をこらえることができず、五人で泣きました。懐かしい青春の思い出です。

それから三六年経ちました。赤岸はすっかり変わってしまいました。現代の霞浦県赤岸村は、ホテルも整備され驚くべく近代化されました。

ました。始めて訪ねた時の鶏の声で起こされた風景が今は全くなり、ビル群が並び立つ大都会となりました。空海漂着地の砂浜は、湾岸を通る高速道路で風景は一変しました。

赤岸は、空海の漂着地であるため、日本側も色々と協力してきました。僅かに残る砂浜に「祭海亭」を建てました。私たちが訪ねた十年後に、高野山真言宗は「空海大師記念堂」(第一番)(写真003)を建立しました。以後日本側が赤

岸を訪ねることは、この堂の空海大師をお参りすることとなりました。記念堂の前面二百メートルのところには「空海坊」と言う門を建てました。

赤岸には、空海が訪ねたであろう古刹「建善寺」（第二番）（写真004）があります。この寺の境内にも「空海記念堂」が建てられました。

私は、この赤岸に四〇数回は訪ねています。空海が私を呼ぶからでしょう。

#### ◆福州

赤岸から海路南へ二百五十キロほどのところに馬尾港ばびこうという港があります。空海らは赤岸で四十数日ほど留まったでしょう。『日本後紀』巻十二には、十月三日福州に廻航とあります。つまり海路を福州馬尾港に來たのです。馬尾港は空海当ても中国南方での大きな港でした。大使藤原葛野麻呂は、この地で大使としての書状を何度も中国側へ提出しますが認められません。そこで能書と言われている空海に文章を依頼します。

空海の文は、「大使の為に福州の觀察使に与える書」と題して今も残っています（『性靈集』巻五）。この文章によって遣唐使一行の上陸が認められることとなります。確かにこの文章には、空海の素養が満たされています。空海の素養とは、中国の古典です。哲学書、文学書、歴史書などからの引用箇所がふんだんに使用されているのです。ともかく含蓄のある内容と卓越した文章表現から、中国の教養人を驚かしたことは十分に察知することが出来ます。この横綱相撲としての文が認められ、許可が出たのです。しかしその名簿二十二人中に空海の名はなかったのです。そこで空海は私的に自分の入京を懇願する文を作っています。「福州の觀察使に請うて入京する啓」（『性靈集』巻五）が



開元寺 空海像

写真005 開元寺



それです。空海にも許可が出て、二十三名は十一月三日、福州を長安に向けて出発するのです。福州市内に入ると、「開元寺」(第三番)(写真005)があります。唐代の名刹です。ここにも寺内に「空海大師記念堂」が建立されています。

さて、十一月三日以後長安着までの資料は全く見出せません。ただ十二月二十一日長安城東側春明門長樂駅に到着とあります。



写真006 百葉船

私が、最も苦労したのは、この間の空海等の行程です。八〇四年の官道また川を調べました。この工程を創るのに二年はかかりました。馬尾港から閩江を遡って南平に着きます。閩とは福建を意味します。福建省の中央を東西に流れている大川が閩江です。南平までは陸路であったか水路であったかは選びかねるところですが、私は水路であると決



定しています。

唐代の閩江は船による交通が思っていたよりはるかに発達していたようです。空海一行も百葉舟という七・八人乗りの小舟で行動したと思います（写真006）。調査のため私も動力船で閩江を遡りました。川の流れば実にさまざま風景を見せてくれました。上流は浅瀬が多く、川の流れば階段のように段をつくっています。岩が目を剝く急流の中に目標の目印の竹竿が点々と立っています。曲折しながら船は進む。慣れた水夫でないと到底だめです。大使一行は七日の行程で南平に着いたと結論しました。

#### ◆南平・建甌・浦城

私たちはまず唐代の船着場を捜しました。その場所は容易に見つかりました。一九八四年の福建は全て未開放地区であったのですが、私たちを迎えるために、南平・建甌・浦城の政府、学者たちは何度も会議を開いて、遣唐使・空海・八〇四年を研究していたのです。

閩江に接した唐代船着場に立って四方を見ると、南平市に入る「延寿門」がありました。遣唐使一行はこの門を通り南平市内に入ったのです。

福建は山間地域が多く、南平も四方を山に囲まれた峡谷のような土地でした。北からは建溪けんけい、西からは富屯溪ふとんけいが南平で合流して閩江となり東へ流れる。閩江は、物資運搬の国道なのです。

南平市街の対岸の高台にある九峰公園に登りました。公園の中にある冷風閣に立つと、南平の町並みと二つの川が合流するさまが眼下に見下ろせます。閩江をはさんで左右の山の上に二つの塔が見えます。劍津双塔といえます。



写真007 天心勝果禪寺

南平市からは北へ建溪を遡り、建甌、浦城と川を進んでいきます。遣唐使一行はここでも百葉船という五、六人乗りの船を連ねて行ったでしょう。建溪の流れは緩く、百葉船が頻繁に往来する唐代の光景を彷彿とさせます。この川は、現在は中流にダムができました。

建甌でも唐代の船着場は容易にわかりました。その場に立ち周囲を見回すと、ここにも門があり、「通濟門」といい、漢代からこの場所にあるという。すると遣唐使一行も、この門をくぐり建甌市街に入ったことになります。私たちと空海との距離は急に接近してきました。空海一行がすぐ目前の門をくぐる幻想を見るようになったのです。

建甌から浦城までは百六〇キロ。この行程も水路であり、五日間を要したと考えます。

浦城の八〇四年の船着場も容易にわかりました。門があり、「登瀛門」といいます。浦城の町は、山に囲まれた盆地ですが壮大な広さを持っています。気候温順なために、穀物が豊富です。福建と浙江と江西省がまじわる山間地域にあります。福建省に位置しています。官道沿いにあり、「古来中国では、浦城を得た者は勝利し、失った者は敗れる」といわれ、二千年以上の歴史を持つ豊かな町であります。市内は、近代のビルと昔ながらの瓦葺の民家が混在

して、市街の仙廬山に登ると、建溪と町の関係が遠望でき、小舟を横に並べて板を渡して橋にした浮橋が見えます。市街には、空海が立ち寄ったと思われる「天心勝果禪寺」(第四番) (写真007) という古刹があります。

空海一行は、浦城からはいよいよ陸路をとり、空海ロード南方での難所「仙霞嶺」に入ります。

その前に、世界遺産武夷山に一寸寄り道をしましょう。

## ◆武夷山寸描

武夷山は、福建省の北部にあります。風光明媚そのものですが、交通の便が悪く、山中なので訪ねる人は少なく、最近まで一般の人の往来はありませんでした。名山が多いため新興の旅遊都市として再生することとなりました。国家重点風景名勝区、国家重点自然保護区です。風景区は、特に奇峰が連立する独特な風景をなしています。最近是国内・国内のメッカの一つとなっており、一九九四年に飛行場もできました。現在はこの飛行場を使用すると空海入唐道追体験に便利です。飛行機は、上海、福州、廈門、香港等へ飛んでいます。

私が武夷山を訪ねたのは、一九八五年です。空海入唐道の浦城から近かったためです。私はこの風光が気に入りました。後二〇数回は訪ねているでしょう。初めは福州市から汽車で閩江に沿って遡ること二時間半で南平に着き、そこからバスで三時間かかりました。

武夷山の第一の魅力は奇峰です。この大自然は景観に恵まれ、奇観の岩山が重なっています。天遊峰、大王峰、王女峰、小蔵峰、天柱峰、磨盤峰といった峰は、九曲溪という川の流れの左右にあります。星村という村から始まる九曲の流れを、孟宗竹で作った筏を浮かべて下るのです。目の前に展開する奇峰の変幻は、大自然のパノラマです。

第二の魅力はウーロン茶です。中国には茶の種類は多い。たとえば浙江省では龍井茶を中国最高の茶であるとしています。龍井茶は緑茶で、日本茶も緑茶です。私の見解では、緑茶としては、日本人にはやはり日本の緑茶の方がよくあります。ウーロン茶は、緑茶と紅茶の間に位置します。ウーロンとは「黒い龍」をいう意味です。茶の葉を蒸して、なお熱鉄板の上でいりつけていくと黒くなり、一枚の葉がねじれて黒い龍のように見えるのでウーロンといいます。武夷山のウーロン茶にも多くの種類があり、岩茶、大紅袍は、日本人が好む味です。空海入唐道の浦城の町から、

少し寄り道をして武夷山に遊ぶのも楽しい。

### ◆仙霞嶺を越えて

浦城から江山（浙江省）へ出るのには、仙霞嶺せんかれいという山脈を越えねばならない。通称仙霞古道といい、唐代はこれが官道であります。

官道沿いに唐代の駅が点々とつづいています。日本で言うならば東海道五三次の宿場にあたると言えます。駅付近は各時代に漢詩が多く作られています。さらに北上すること二十キロに千百四十メートルの浮蓋山ふがいざんがある。唐代

はここに大きな駅があったといえます。現地には分岐点の標識があります。分水嶺であり、水が南は福建省の方へ流れ、北は浙江省へ向って流れています。この道、最近は高速道路となりました。

福建省より浙江省に入ると、すぐ「二十八都鎮」があります。この鎮は唐代は官道にあつたため繁栄していました。明・清代も盛んでありました。ところがとんでもない山中なので、次第に歴史の中で見離されてしまったのです。

二〇〇一年九月、この道を旅行した時のことです。福建省から浙江省へ入るとすぐ、二十八都鎮人民政府の人たちに迎えられました。鎮長の案内で、公道から離れて山中の村二十八都鎮に入ります。二十八都鎮は、江山市の行政区間に位置しています。この鎮は、古駅として有名な鎮で、唐代の鎮もこの場所です。小川



写真008 文昌閣





写真009 仙霞関

に沿って田舎道があり、これが唐代の官道です。鎮に入り二キロほどの道の両側に石造りの古びた民家が並んでいます。

かつての繁栄を偲ばせるように、科挙制度の地方学問所「文昌閣」(写真008)などの多くの建築群が残っています。それらは江山市重点文物保護単位として二〇〇〇年六月、江山市人民政府から公布されていました。

私は、空海の通ったこの道一キロを日本側で唐代の様相に再現したいと申し出ました。このことがきっかけとなり、それなら江山市は道の両側の建築群を唐代に造りかえましようということとなったのです。空海の名のもとで、唐代様式の古鎮復興となったのです。

最近中国のあちらこちらで古鎮復興が行われています。その背景には、中国の国内旅行があります。十五年ほど前までは、国内旅行は実に稀でしたが、急に盛んになりました。これは中国経済の急激な変化によるものです。自転車が自動車に変わったのも同じことです。国内空港も急にマンモス化しました。

観光旅行が盛んになると、見るべきところは風光明媚なところか、歴史の情緒、古刹寺院、少数民族等であります。都市近辺にある古鎮、たとえば蘇州の烏鎮、同里等を初めとする古鎮復興は激しい。水郷の復興も同じです。二十八都もまたこの類であるのです。

二十八都鎮を後にして道は山中の仙霞嶺へと続きます。仙霞嶺の唐代官道は、仙霞古道として十キロほど残っています。両側に山が聳え、窪みになっ

た谷に石畳が続いています。この仙霞古道に四関、三関、二関、仙霞関と名づけられた関所があります。

仙霞関に直行しました。両側の山は、孟宗竹で覆われています。その谷間に仙霞関が見えます。城壁のような石垣の関所が谷を塞ぎ、ちょうど小さなダムのようになっています(写真009)。その場所に「仙霞関」と書かれた石碑が立っています。空海の通った頃を想起させる絵になる風景です。

空海人唐道は、仙霞嶺をあとにして浙江省に入り「江郎山」を右に見ながら進みます。空海は江郎山には登っていないが、現代の観光コースには入れるべきです。江郎山は、天然の偉人峰ともいわれ、中国でも第一奇峰といわれる風景名所地です。武夷山と違って、ただこの山だけが雄大に、天に向かって聳え立っています。

急カーブを江郎山へと登っていくと、遙か下方に町並みが見えます。中腹にホテル「江郎山荘」があり、江郎山の山頂が目の前に迫り、幽玄雄大な自然に包まれた立派なホテルです(現在、このホテルは無くなっています)。ここからは岩肌となり、山肌を削って絶壁に階段がつづき、山頂まで登れます。この階段コースは、最近作ったものですが、筆舌に尽くしがたい。日本では考えられない。

空海の道は、江山市、衢州市、杭州へとつづきます。

現代の観光コースを二つ紹介しておきます。

衢州市内で「孔子南宋家廟」を見学しましょう。中国に孔子廟といえど二カ所あります。曲阜きょくふと衢州です。この衢州の孔子廟は、孔子末裔の第二の故郷です。スケールは大きく大成殿、思魯閣、聖沢楼などからなっています。中には、孔子三代の塑像と伝世の宝である孔子夫婦木像が安置されています。

廟に付設して広く立派な邸宅があり、広い庭園には孔雀が放たれていました。現在ここに孔子七五代目の孫に当たるといふ孔祥楷氏が住んでおられる(写真010)。孔氏は、衢州孔子學術研究会会長をしており、特に文化活動に多忙

のようです。高野山へも訪ねてこられました。

不思議な石窟があります。「世界第九の大奇跡」とも「千年の謎」とも呼ばれています。地上から見ると実に小さなため池です。最近この池で魚を釣っていると、実に大きな魚が釣れました。そこでこの小池になぜ大魚がいるのかと、ポンプで水を出していくと、この池が底に広がっていることが分かりました。とんでもない大きな広さです。地下石窟が出てきたのです。

地下石窟は一万平方メートルあるという。地下洞窟は三六箇所あります。人口で開拓されたものです。洞窟の中は広いドームであり、壁はまるで機械で削りとったように見えます。この洞窟は何に使用されたのか、また石材がどこに運ばれたのか全く分からない。越王勾践が軍隊を隠した秘密基地であろうともいわれている。現在は保存のために、抜いた水をまた入れている。五、六ヶ所の石窟を見学できるようになっています。

空海一行は、江山付近から川で下り杭州へ出たと考えます。唐代は江山から蘭溪<sup>らんけい</sup>までは蘭溪江と呼ばれ、蘭溪から桐廬までを七里灘と呼び、桐廬から富陽までは富春江と呼ばれ、富陽から杭州までを錢塘江といいます。現在、建徳から桐廬までは船旅がよい。雄大にゆったりと流れる川は「小三峡」といわれ、旅の醍醐味が味わえます。桐廬からバスに乗り換え、そして杭州に着くのです。



写真010 孔祥楷氏

## 空海ロード（運河コース）

杭州 ↓ 越州 ↓ 蘇州 ↓ 無錫 ↓ 常州 ↓ 鎮江 ↓ 揚州 ↓ 開封

杭州から開封（唐代汴州）までは、運河です。この運河は隋の煬帝が開き、唐代に整備されていきました。杭州はその最南端です。唐代の運河は「古運河」と呼ばれています。古運河は、現在使用されているものもあれば、すでになくなっているものもある。また新しい運河もあれば、バイパス運河もありさまざまです。だが運河は、現代もやはり国道第一号線といった物資流通の動脈として生きていることは変わりありません。

私たちは、この運河コースにおいても、船着場と町の間係を探りました。運河は遣隋使、遣唐使の記録があるので再現は容易でした。八〇四年の船着場も、各地域の人たちの協力でたやすく知ることができました。

### ◆杭州・蘇州にて

錢塘江を下り、六和塔を左に見て、錢塘江大橋を過ぎると左に柳浦跡（唐代）があり、遣唐使一行はここで下船し杭州市街を北へ向いました。樟亭駅跡（唐代）があり、西湖を左に見て北へ進むと、開元寺跡（唐代）があり、龍興寺跡、そして汽洋湖に出ます。

空海一行はここから大運河を使用して蘇州へ向います。一行は「星に発し星に宿す。晨昏兼行せり」（『日本後記』卷十二）という旅であったので、西湖の美観は見る暇はなかつたでしょう。有名な「靈隱寺」（第五番）（写真011）を



訪ねることもなかったでしょう。靈隠寺にも修行大師像があります。ともかく長安をめざして急いだのです。

杭州市街と空海の関係は、その痕跡を明確にはできませんでした。唐代の開元寺、龍興寺には立ち寄ったかもしれませんが。

ともかく大運河を蘇州に向かいます。

蘇州着。空海の足跡を追っていきます。

蘇州市の郊外の小高い山の上に「靈巖山寺」(第八番)があります。一九八四年私たちが最初に訪ねた時、住職の明学法師は突然「実はこの寺には空海大師の銅像が二体あります」といいだしました。私たちは経蔵の二階に安置されていた二体の空海像をみました。空海に出会ったのです。唐突なる出会いでした。

銅像は、高さ三十センチほどで、像の裏側には二体とも「空海像」と彫られています(写真012)。この像は、一九五〇年頃、近くに住む呉谷宜という密教の信徒が寺に預けたものでした。この方はすでに逝去され、像の由来はわかりません。最初の追体験の旅で体力も限界であった私たちの前を、空海はちらちらと動いていました。それは私たちの信仰からの幻想であります。そのような時この空海像を目前にして、びっくりしました。空海はここで私たちを待っていてくれたと感じました。空海からの叱咤と共に激励を受けたのです。

以後私は、空海ロードの巡礼で、たびたびこの空海像に会いにきました。



写真011 靈隠寺



写真012 空海像



写真013 寒山寺

さて、古運河は寒山寺の門前を通っています。唐詩「楓橋夜泊」で有名な「寒山寺」（第九番）（写真013）です。空海はこの寺に立ち寄ったと考えるのは自然です。寒山寺の前を、古運河は通っているからです。最近、寒山寺は回廊の一角を崩して、そこに修行大師像を建立しました。福建の開元寺にも開封の相国寺にも二十八都鎮等にも修行大師像が建立されています。まさに空海が形となって二四〇〇キロを歩き出したといえるのです。

今は、空海の入唐（八〇四）の道福建から長安までの道を辿っています。逆に、空海は八〇六年長安を二月末出発

して、遣唐使の道を引返し、杭州、越州（紹興）、寧波、明州と帰途につきました。越州では、四ヵ月ほど滞在したようです。そこで寝食を忘れて経文等を集めています。このことは空海が越州で書いた「越州の節度使に与えて内外の經書を求むる啓」（『性靈集』巻第五）が在ることから明らかです。この地方では「阿育王寺」（第六番）があります。

この寺には、お釈迦さまの舍利が伝わり国宝になっています。「天童寺」（第七番）は、禅宗の古刹です。当時の歴史から鑑みて、空海は両寺に立ち寄ったと想像しています。

◆無錫・常州・鎮江・揚州にて

古運河は、蘇州から無錫、常州へとつづきます。無錫の唐代の運河は、市の中心街をとおっているので運河の船着場の位置も容易にわかります。京杭大運河は常州へと至ります。

常州市街に「天寧禪寺」（第十番）という寺があります。現在は使用されていないが、古運河はこの寺の門前を通っ

ています。空海が門前の船着場で下船して、石段（唐代のものがある）をのぼり、天寧禪寺へ入っていったと推測するのは、むしろ当然といえます。

天寧禪寺を私たちが始めて訪ねた一九八四年は、洪徳法師という住職がいました。住職は、解放前この寺の四天王殿の前に「空海上人留学所」と書かれた看板があったために、日中戦争の時に日本軍が来たが、その看板を見て、この寺を守った、と話してくれました。空海は長安からの帰りもこの寺に立ち寄ったのですとも話してくれました。



写真014 天寧禪寺

この寺は現在でも江南第一の禪林と呼ばれています。最近大塔が完成しました（写真014）。塔というよりは大きなビルディングがそのまま塔となっている感じです。エレベーターで屋上に登ると、常州市街が一望できます。

大運河は鎮江へとつづきます。鎮江には「金山寺」（第十一番）と「定慧寺」（第十二番）という古刹があります。特に金山寺には空海との関係が残っていました。空海上人をしので書かれた七言絶句の詩が三首出てきました。詩の右側には「空海上人修行古刹」または「弘法大師修行古刹」と書かれています。ここにも空海の伝説が残っていたのです。

揚州「大明寺」（第十三番）は、鑑真をとおして、日本には馴染み深い寺です。寺の前に詩情豊かな瘦西湖そうせいこがあり、唐代は古運河ともつながっていたようです。寺内に修行大師像が奉られています。

以上、杭州、越州、蘇州、無錫、常州、鎮江、揚州と古運河沿いに、空海の足跡をおいかけてきました。そこでは空海伝説が残っていたことを見出したのです。

揚州から開封の間も、遣唐使は運河で行きましたが、この間は確実な再現は無理でした。



## 空海ロード（古都コース）

開封 ↓ 鄭州 ↓ 洛陽 ↓ 西安（長安）

開封（唐代は下州）から西安までは陸路です。南方コースは山間地形と川の関係が重要であり、運河コースは物資運搬の動脈としての運河と都市の関係に空海の足跡がみられました。

さて、陸路としての古都コースは、空海ロード再現において面倒なことがありました。一つは黄河の氾濫であります。黄河は氾濫すると実に数キロ数十キロとその流れは変わります。一九八四年最初の私たちの追体験の時も、開封近くで氾濫の場所に遭遇しました。高台から見ると、夕暮れ迫る中で、遠くからは教頭の龍が大地にうねり曲がり白く光っていました。近づくといくまでもつづく泥道の工事現場でした。雄大な中国の景観をみました。ともかく道を西へむかって進むしかありません。

開封には「相国寺」（第十四番）（写真015）という寺があります。唐代に壮大であったこの寺にも空海が留学時滞在したとの伝説が残っています。弘法堂がありその中に玄奘と空海が奉られています。

鄭州から洛陽の間、河南省登封県に崇山「少林寺」（第十五番）があ



写真015 相国寺



写真016 白馬寺

ります。この寺は、有名な達磨大師が来て、面壁九年の修行をした禅宗発祥の地です。寺内の歴代住職の墓「塔林」が有名です。空海は訪ねていないが、中国の寺を理解することにおいて訪問する価値があります。少林寺拳法の歴史を持つ古刹です。

鄭州をとり洛陽に着きます。洛陽は中国仏教発祥の地です。後漢明帝が建立したという白馬寺（第十六番）（写真016）に空海が立ち寄ったという想像も大いに許されましょう。白馬寺にも修行大師像が立っています。洛陽の観光としては、まず龍門石窟の見学でしょう。

洛陽は、空海との関係というより、真言密教の立場においては、むしろ真言密教の相承者であるインド僧善無畏、金剛智との関係が重要です。

善無畏は開元四年（七一六）陸路長安に入り、『虚空藏求聞持法』一卷を翻訳します。これは大安寺の僧道慈によって日本に持ち帰られました。さらに開元十二年洛陽に入り、福先寺で『大日経』を翻訳します。この両経が空海に与えた影響は、非常に大きなものがあります。空海が入唐求法するきっかけは、この両経の影響によるからです。

善無畏は洛陽で入滅。龍門の西山に葬られます。その場所「広化寺」（第十七番）（写真017）は、不明でしたが最近



写真017 広化寺門

明らかとなり、大伽藍となつて甦りました。山門を入ると日本側が建てた「善無畏三藏顯彰碑」があります。また善無畏が『大日経』を翻訳した「福先寺」も明らかとなり、地域の人の協力で新しく甦りました。

金剛智は、開元七年（七一九）海路長安に入り、翌年洛陽に入りました。金剛智が翻訳した数多くの『金剛頂経』系の経典を空海は熱心に中国で収集しました。これらの経典が空海思想を作り出す根本資料となったことは論を俟たないところであり、金剛智は洛陽の広福寺で入滅、龍門に葬られました。その墓塔「奉先寺」は、これ又最近まで不明でしたが、現在は発掘されて明らかとなり、その場所に「金剛智三藏顯彰碑」が建てられました。これら発掘の仕事は、龍門石窟名譽所長の温玉成先生と私とが協同研究したものであります。

現代中国の仏教は、破竹の勢いを呈しています。寺院の建造物、僧侶の養成も順調です。だが、中国密教において最も重要なこと、それは唐代会昌五年（八四五）の仏教弾圧です。これより今日まで密教の伝承（唐密）が途絶えていることです。唐密の阿闍梨がないからです。二〇〇五年、中国人李新正が、高野山の静慈圓の弟子となり、高野山の厳しい修行を終え阿闍梨となり、二〇〇八年春、高野山大学院を終え、唐密を中国に持ち帰りました。以後順に中国人が阿闍梨になるため高野山に来ています。項を変えて後に触れます。





写真018 函谷関

遣唐使一行は洛陽から函谷関をとおり長安へと急ぎます。函谷関は、漢代の函谷関と、秦代の函谷関（写真018）があります。遣唐大使らは、十二月二十一日長安城東壁中央の春明門長樂駅に到着。二十三日、朝廷から内使趙忠が二十三頭の馬をひいて迎えに来て、春明門から長安城に入り、宣陽坊にある官邸におちつきます。二十四日には葛野麻呂は皇帝徳宗に国書および貢物を呈上し、二十五日に徳宗と接見が行われ、大使の責務を果たしたのです。

紙幅の関係で一寸あわただしく書いていきます。こえて貞元二十一年（八〇五）一月二十三日徳宗が六十四歳で崩御し、二十八日には順宗が帝位につきまます。大使葛野麻呂は帰国することとなり、二月十日長安を出発します。この日空海は、延康坊にある西明寺へうつります。空海の求法行脚は、いよいよ積極的になっていきます。空海は、醴泉坊にある醴泉寺で北インドの般若三蔵と牟尼室利三蔵について、サンスクリット語及び南インドに伝わるバラモンの宗教

すなわちインド哲学を学んでいます（『付法伝』）。

空海が師恵果和尚（けいか）を「青龍寺」（第十八番）（写真019）に訪ねたのは、同年五月末か六月初めのことです。青龍寺は新昌坊にあります。従って空海は長安城中を東西に端々まで歩いていることがわかります。大雁塔、小雁塔は空海の脳裏に焼き付いていたことでしょう。





写真019 青龍寺

恵果和尚は、「相待つこと久し」と言つて空海を迎え、自分の命がすでにないことを覚つてか、空海に次のように灌頂かんじょうを授けていきます。まさに劇的な場面が演出されたのです。

すなわち六月十三日には、学法灌頂壇に入つて胎藏の灌頂を受ける。七月上旬には、金剛界の灌頂を受ける。八月十日には、阿闍梨位の伝法灌頂を受ける。つまり空海は、この僅か三ヶ月間に胎藏・金剛の両界の大法をことごとく授かり阿闍梨となつたのです。

恵果阿闍梨は、密教の後継者を作るといふ阿闍梨の責務を果たした満足感があつたでしょう。その後まもなく十二月十五日遷化します。

この青龍寺も一九八四年「弘法大師御入定一一五〇年御恩忌記念事業」として、「恵果・空海記念堂」と命名され、日本の真言宗各派総大本山会によって再建され甦りました。

以上、空海入唐の道の再現とその踏破について述べました。

「空海ロード」と名づけたこの道は、二〇〇四年に「空海入唐千二百年記念事業」として高野山真言宗が行なつた諸行事によって、より確実な巡拝ロードとなりました。その事業を報告して、この項を終わります。

## 空海入唐千二百年記念事業

二〇〇四年は、空海が入唐してから一二〇〇年目に当たります。高野山真言宗は、次の如くの記念事業を行いました。交流事業としては、

- ① 西安青龍寺「惠果空海紀念堂」、霞浦赤岸「空海紀念堂」への参拝訪中団
- ② 福建省と高野山真言宗との日中友好の促進。ここ二十年間、福建でお世話になった人との旧交交流会。
- ③ 「空海研究会」会員を日本に招請。

文化事業としては、

- ① 「空海と中日文化交流国際学会」の開催。於上海「復旦大学」
- ② 「弘法大師入唐千二百年記念書道展」の開催。中国と日本との両方で実施。
- ③ 赤岸小学校で高野山大学生が教育交流。
- ④ 中国（福州―西安）二四〇〇キロの空海入唐の巡礼。青年教師会が踏破。

記念事業としては、

- ① 記念出版物『空海入唐の道』（静慈圓著）の発刊。
- ② 「福州霞浦赤岸の空海大師紀念堂」、「祭会亭」の補修整備。
- ③ 記念護摩奉修。赤岸「空海大師紀念堂」と九州五島列島福江島にて挙行。
- ④ 空海の通過した浙江省の山中「二十八都鎮」の道路の舗装と「記念碑」の建立。

以上の記念報恩事業をなし終えました。

## 二 現代中国の仏教

### 現代中国の動き

第二点は「現代中国の仏教」ということで、お話し致します。

ここ三〇年余りで、中国が激変したことを、まず知ってほしいと思います。どういうことかといいますと、私らが中国へ行き始めた四〇年前は、北京も上海も、日本のテレビに出てくるのは、常に自転車の洪水でした。しかしながら、その自転車が現在は自家用車になりました。それが現在の中国です。

自家用車になって何が変わったのか。高速道路が必要になりました。高速道路は、中国においては田舎から都会まで全て、三車線・四車線の高速道路が中国全土にできています。次に、高速鉄道・新幹線ですね。それが中国全土に敷かれました。つまり中国にバブル経済が到来したのです。豊かになった中国では、国内旅行が非常に盛んです。二五年ほど前までは、国内旅行をする中国人はいなかったですね。

国内旅行が盛んになると、観光地の開発が急激に盛んになりました。観光地として、古い歴史の場所とか、美しい自然、仏教の聖地、少数民族への関心、また食文化とかいったところが観光地になりました。

観光地が出来る、空港が劇的にマンモス化しました。各地に大きな空港ができました。女性のファッションなども急激に変わってきました。そのような変わり方が、現代の中国です。毎回日本の関西空港に帰ると、何と小さな田舎の空港かと驚きます。

三〇年・四〇年前の中国は、日本の戦後そのものでしたけども、現在はそうでない。最近中国人の「爆買い」とい

う言葉がありますが、爆買いできる人たちが中国人の一〇分の一はいる。ということは、日本人口の全てにあてはま  
りますね。中国は、日本人口の約一〇倍であり、また面積は、二五倍の広さです。その大きな国が劇的に動きだした  
のです。それが現代の中国です。

### 中国仏教の動き

次に、現代中国と仏教です。その仏教も信じがたい動きをし始めました。私らが最初に行った四〇年程前は、仏教  
のお寺は都会も田舎も、何ていいますかね、小学校の廃校のような状況でした。僧侶は、生活が出来ないものの代表  
でした。ところが現在は、全国どこも古刹は整備され、新しく建設されたお寺は、宮殿のようなお寺になりました。

中国の経済は、バブル経済でアメリカもその発展の速さに一目置いていることは皆さまがご存じの通りです。しか  
し仏教の経済は、中国政治上の経済よりもっと伸びております。このことは日本の政治家も僧侶も知りません。中国  
の「仏教経済」の現状は、日本のテレビ・新聞の報道で述べているものを見ることがありません。現代中国は経済大  
国と言えますが、その中で仏教経済は、もっとも大きな動きをしているのです。

つまり、爆買いいできるような豊かになった人が、仏教に関心を持ってお寺に出入りし始めました。私は僧侶です  
ら、日中の文化交流で仏教を中心に中国の現場と四〇年間係わって来たのです。中国仏教を現場で経験してきて、唾  
然とせざるを得ない現実がある。現代中国の仏教は、変わってしまったのです。このことをご披露しておきたいと思  
います。

儒教・道教・仏教のなかで、仏教が祖先崇拜と現世利益を中心に動き出しています。若い人も恋愛問題とか、受験  
問題、結婚とかいうかたちの関心が深まってきて、寺院にお参りしてくる。寺院での精進料理も人気があります。一



写真020 静安寺

この寺で何か行事がありますと一万人ぐらいすぐ集まりますね。そういう状況が、中国の仏教であります。二・三のお寺を見ていきます。

### 中国の仏教寺院と社会の係わり

#### △静安寺▽

上海では三つの大きな古刹があり、その一つに「静安寺」(写真020)があります。上海市の中心にある静安寺も四〇年前は、お寺の形態をなしていませんでした。先ほど申しました、田舎の小学校の廃校で廊下がガタガタの、そういうお寺でした。

今そのお寺がどうなっているかというところ、例えば、お寺の中心は本堂ですね。中国では大雄宝殿といいますが、外国から南方の香木を取り寄せて、大きな柱が全部香木でできています。

大雄宝殿の中の本尊も新しくできましたが、「十五トンの白銀で本尊さんをつくりました」との説明であります。

このお寺の住職慧明法師と私は、二〇年来の付き合いです。「なぜ、ここまでこんな大きな立派なお寺をつくるのか」と尋ねましたら、住職は「うん、まあバブルである今日の中国では、このようなことが出来る。だが中国の歴史が示しているように、中国はいつ一大事が起こるか分からない。その一大事が起こった時に、こんな立派なお寺がつぶせるか、というよう



なお寺を今作っているのです。」との答えです。そして「建物の次は教育です。」との答えでした。

静安寺は、精進料理をしております。私たち団体に精進料理の接待をしてくれました。今まで私が見たことも、味わったこともない精進料理でした。立派な部屋の中で、一皿ずつ趣向を凝らした美しく味な料理の数々でした。想像していた精進料理のイメージが吹っ飛んでしまいました。機会があれば、一度訪ねる価値は十分にあります。精進料理は、ヘルシー料理として現在はやっています。このような贅沢が出来る中国人がいるという中国の現実があるのです。

仏教経済が、中国で動いているという報告です。

#### △月珠寺▽

例えば、四川省洪雅県の田舎に月珠寺げっしゅうじというお寺があります。月珠寺は丘の上にある尼僧の寺です。私が最初に行った時には、百人ほどの尼僧（尼僧の姿をした老婆）がいました。二年後にもう一度行く機会がありました。すると尼僧が二百人ほどに増えていました。おばあちゃんばかりの寺です。

なぜ尼僧が増えているかというと、お寺でお年寄りを預かっておるのです。ここ洪雅県の田舎は、出稼ぎが多い。若い人はお年寄りを寺に預け、都会に出稼ぎに行くという習慣です。だから、お寺が老人ホームとして機能しているわけです。お寺では一様に尼僧としての集団生活です。寺で草取りをすれば、運動になります。同じ食事ですから贅沢は言えない。服装は皆さん同じ尼僧の姿であります。正月、お盆には働き手は帰省し寺に寄付をします。田舎においての寺の活かし方なのです。

## △少林寺▽

日本人がよく知っている少林寺拳法の少林寺です。河南省の少林寺は、少林寺拳法で、お寺の経営をしています。お寺が少林寺拳法の学校を二〇ぐらい経営しています。一番大きな学校は三〇〇〇人いるというのです。学生に少林寺拳法を教えて、そして就職させていく。就職先は警官とか警備関係とか、結構あるようです。かつて「少林寺」という映画がありました。少林寺を有名にするのに役立ったようです。拳法をやっている学生が一番なりたいのは、映画スターを目指しておるようです。それはほんの一部としましても、つまりお寺が少林寺拳法を中心にして、学校を創り、町区画をつくっています。また観光にいかしている。地域活性になっているのは確かです。外国にも多くの支部をもっています。

## △大雁塔・慈恩寺▽

もう一つだけ言っておきます。『西遊記』というのは、皆さんご存じですね。玄奘三蔵が、孫悟空と猪八戒と沙悟浄を友としてインドへ仏教を求めて行きます。二七歳のときでした。十七年間経過して中国へ帰ってくる。その玄奘三蔵が持ち帰ったお経の本を収めるためにつくったのが「大雁塔(だいがんとう)」という塔ですね。今も立派な塔としてあります。空海も入唐の時に眺めた塔です。

その大雁塔の一番上に十年前に登りました。また五年前にも登りました。そして現在、大雁塔へ登ってください。大雁塔の上から何

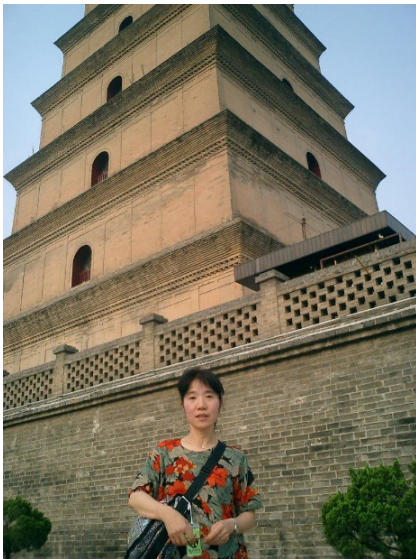


写真021 大雁塔

が見えますか。登るたびに違った光景が見られます。大雁塔を中心に町並みが、現在の都市構造計画として、町の区画をやり直しています。つまり西安の町が変わってしまったています。

私が言いたいことは、お寺が現在に機能しているということです。今例示しましたように、少林寺なら少林寺なりの、お寺の歴史を中心に、お寺の特色を活かしながら、お寺が現代に機能しているということです。お寺は観光地にもなっています。寺院の歴史とその寺院の特殊性を結び付けて、現代に生かしているのです。

皆さんは、中国共産党は、信仰上の自由から、お寺の活動を認めてないと思っただけですが、そうではありません。お寺に対して、信仰を認め援助し共存しています。それが中国の今の仏教の復興なわけです。

中国仏教の現状を、話しました。中国の田舎・都会にかかわらず、ここ二〇年・三〇年の間に、お寺が全くよみがえっています。

現代中国と仏教において、共産党は仏教を押さえるのではなしに、復興させている。そして中国のバブル経済が、さらにお寺に還元しており、立派なお寺になると申しておきます。

### 三 現代中国と密教

第三は、「現代中国と密教」ということです。このことは直接弘法大師空海と関係しています。まず中国における密教とは何かについて少し話します。中国には、インドから密教が伝わってきました。それが唐時代です。

開元四年（七一六）、インド僧の善無畏が陸路で長安に入り、興福寺の南院に落ち着いたのち西明寺に移ります。

善無畏は『大日経』系の密教を伝えます。開元七年（七一九）、同じくインド僧の金剛智が海路で長安に入り、慈恩寺に落ち着いたのち薦福寺に移ります。金剛智は『金剛頂経』系の密教を伝えます。この二系統を、中国僧惠果阿闍梨が継承します。空海は惠果阿闍梨から密教を継承します（八〇五）。密教とは、仏教の一流派の事ですが、唐代の密教は、各宗派の中で、最もきらびやかに輝いていました。

ところが会昌五年（八四五）に武宗の仏教弾圧があります。中国仏教には、歴史上四度の仏教弾圧があります。「三武一宗の法難」と言います。中国仏教史上行われた前後四回の廃仏事件です。四四六年太武帝、五七四年北周武帝、八四五年武宗、九五五年世宗の四回です。会昌の法難は最悪の厳しいものでした。（近代の紅衛兵を含めると五度といえるでしょうか。）そのうち禪系統の仏教、浄土系統の仏教は緩やかに回復していきます。この二系統が現代の中国仏教なのです。しかし密教は、八四五年以後、今日まで回復していません。つまり唐代密教は中国にないのです。ここに今日の密教の問題があるのです。

歴史は不思議な現実を作りだします。惠果阿闍梨は代宗・徳宗・順宗の三人の皇帝と関係し、三朝の国師（三代の国師）と言われています。千余人の弟子を持っていました。しかし惠果阿闍梨から『大日経』と『金剛頂経』両方の密教を継承したのは、義明と空海だけです。だが義明は若くして亡くなります。空海だけが残ります。結果論からして不思議なことが起こったのです。

日本僧空海が入唐し惠果阿闍梨から密教を継承し、唐代密教を日本に持ち帰ったのです。したがって唐代密教は、現代の中国にはなく、日本で空海を祖師とする真言宗において一一五〇有余年連続と継承されているのです。不思議でしょう。

これまでお話ししましたとおり、現代中国では仏教は盛んです。そこで政府も、密教の復興を認めるようになりま

した。しかし唐代密教は何かというと、中国の仏教界も政府もわかりません。どうしたらいいのでしょうか。

ちよつと申しておきますと、密教復興という意味では、チベット密教の復興という意味ではありません。唐代の密教（唐密）の復興という意味です。チベット密教は中国の歴史の中で、なお少し問題を抱えているのでここでは触れません。

さて、唐密の復興には空海が必要になりました。空海はどこにいるかというところ、高野山の奥の院ということになります。空海は、今も高野山奥の院で禅定に入ったまま、人々を救い続けております。これが弘法大師への信仰です。そうすると、空海と高野山が今、中国では必要となっているのです。この密教の復興に、私は係わっているのです。

私は三つの方面から係わっています。第一は、密教学の復興です。第二は、中国人の阿闍梨をつくることです。第三は、密教道場を造ることです。以下に述べていきましょう。

### 第一、学問として密教をお返りする。

#### 密教の国際学会の現状

一九八四年、私は「空海長安への道」と題し、中国福建省霞浦県から西安までの二四〇〇キロを踏破しました。以後毎年この道を精査し、「空海ロード」と命名して、公に巡礼道としました。

空海の入唐ルート踏破から五年後（一九八九）、福建省寧徳市社会科学連合会に「空海研究会」が設立されました。私は、名誉顧問となり福建省において二〇〇六年までに五回の学会を行ない、学会誌『空海研究』を発刊しました。空海学術討論会は、福建省内で行われ、国際学会と名づけ廈門大学を始め、福建省外の大学にも呼びかけました。各回共に四〇ほどの論文が集まりましたが、学問の水準がさほど高まっていきません。やはり地方色を払拭できない



ことがわかりました。

そこで上海・復旦大学韓昇教授の協力を得て二〇〇四年（平成一六年）四月「空海与中日文化交流国際学術検討会」と名づけ復旦大学で国際学会を行いました。高野山大学（代表・静慈圓）と復旦大学歴史系（代表・韓昇）の両大学共催の学会です（写真022）。この学会は成功しました。つまりこれ以後の国際学会では、大学の研究者の多くが集まり、次第に大きな学会になっていきました。



写真022 復旦大学

何故か、その状況を見ておきますと、基本は、中国の人たちが、豊かになった、ということでした。豊かになったという意味で、歴史を見直した始めたのです。大学で、中国の歴史を中国人が研究するようになりました。そして、中国人である私たちが、中国人であるという、その自覚がここで持てるかというと、やっぱり歴史のなかの唐時代であるということに気が付いたのです。

そこで、「唐代文化」をテーマとする国際学会が、二〇年ぐらい前から急に始まりました。唐代文化の研究を進めると「唐代仏教」に突き当たります。唐代仏教の研究を進めると、唐代仏教で一番華やかな「唐代密教」に気付いたのです。ここ一〇年ぐらいで、唐代密教は、年に三つぐらいは国際学会をしますのです。そこに空海をテーマとする国際学会も多くなってきました。大学の研究者、僧侶、政府関係の人たちが一緒になって学会をしますのです。少し例示しておきましょう。

例えば、二〇一〇年（平成二二年）四月、陝西師範大学宗教研究中心の呂建福先生が主催して「第一回中国密教国際学会」が開催されました。この学会は、アジアにおける密教研究が動き出したことで、実に大きな歴史的意義があると考えます。この学会は、陝西師範大学と法門寺が連携して開催されました。

二〇一一年（平成二三年）一月には、「大興善寺与唐密文化學術検討会」が開催されました。これは、西安の唐代密教の中心寺院であった「大興善寺方丈晋山式・大雄宝殿落慶及び本尊開眼」として開催された学会です。まさに唐代密教の国際学会でした。学会には中国全土、モンゴル、チベット、インド、台湾、香港からの大学の先生方と各研究機関からの参加者があり百五十名の発表者がありました。

この学会の主題は、「長安密教・世紀論壇」。開催場所は西安恵賓苑賓館。開催当日には発表者の内容がすでに四冊の論文集になっていました。第一篇…唐代密教的淵源与伝播。第二篇…唐代密教的理論与实践。第三篇…唐代密教的文化与芸術。第四篇…唐代密教的交往与伝播。です。

閉幕式で、陝西省仏教協会会長・大雁塔方丈増勤法師の主催者代表の挨拶がありました。その堂々とした態度と学会のまとめの発言には、仏教の長に立つ者の威厳が感じられ感服しました。中国の僧侶も学問がなければ、仏教の長にはなれないことを見せつけられた思いでした。事実、現在は学問がある若い僧が、大寺・古刹の方丈になっていくことを経験しています。

以上のように、中国密教は動いています。以下に学会の事を少し追加しておきます。

二〇一一年（平成二三年）一二月に、山東大学仏教研究中心が主催し「唐密文化在仏教中心地位与影響」が開催され八つの分科会がありました。この学会は、山東大学仏教研究中心と山東省東明県光明寺が連携して開催されました。

二〇一二年（平成二四年）六月に、「仏教与唐代文化建設學術研究会」と題して、西北大学仏教研究所と香港中華

密教会とが連携して国際学会が行なわれました。論文は、各三五名ずつ三冊にまとめられました。

二〇一三年（平成二五年）六月に、呂建福先生主催で「第二回中国密教国際学会」が浙江省紹興市の新寺院で開催されました。今回のメインテーマは、「密教文献文物の整理と研究」です。九つのテーマに細分化され研究発表がありました。

二〇一六年（平成二八年）六月、私は北京・中国人民大学教授張文良先生の招待を受け、密教文化の講演を行いました。これは中国人民大学と民族大学が「東アジア仏教研究センター」を設立しての招待状であります。

二〇一六年（平成二八年）八月、福州市開元寺で「空海学術国際学術検討会」が行なわれた。開元寺の釋本性方丈は、私の三〇年来の旧友です。

二〇一六年（平成二八年）八月、五台山において文殊菩薩をテーマに国際学会がありました。一二〇人の発表がありました。

二〇一六年（平成二八年）一〇月、「中華唐密教復興国際学術シンポジウム」が、遼寧省榮口市三昧書院」で開催されました。七つの細目に分かれての発表内容でありました。

二〇一六年（平成二八年）十一月十六日、西安の大興善寺から招待状が来ました。大興善寺に「中国社会科学院仏教研究中心密教文化研究基地」が創設される発会式でした。発足の式典と同時に学術発表がありました。同時に次の学会がありました。即ち、

二〇一六年（平成二八年）十一月十八日、「漢伝仏教祖庭文化国際学術検討会」が、陝西西安曲江賓館でありました。主催は、中国仏教協会・中華宗教文化交流協会。共催は、北京大学、陝西師範大学です。各国から研究者が集まり百三十名が発表しました。

二〇一六年は、特に多くの学会がありました。私は、これ等の学会で全て研究発表をしてきました。これ等の学会での日本人の発表は常に数名でした。

### 日本の僧侶・研究者は、中国密教への関心が必要

以上、最近の中国における密教研究の現状を示しました。唐代の密教思想への関心が急激に高まってきているのです。これらからも理解できるように、政府の協力によって、大学と寺院が連携して、国際学会を開催しています。学者の招集は大学が行ない、学会の資金は寺院負担に依るところが大きいのです。寺院の経済力の大きさを知らされるのです。

この一連の密教研究の動きに接して私が感じた事は、パソコンの台頭です。パソコン操作によって、外国の研究は即座に手に入れることが出来ます。学会の中国側発表者も、自分のテーマに関しては、日本人の研究についても整理していました。

密教の思想研究は、着々と進められています。中国で密教復興がなれば、日本の密教はどうなるのであろう。私が、中国の密教研究と関係しながら思うのは、日本の仏教・密教共に、その資料の原点は「漢字」が中心資料です。つまり空海の書き言葉は漢字です（梵字悉曇も必要ですが）。日本語ではないのです。漢字文化圏の中国が必要であるという事です。特に日本の僧侶・研究者は、ますます中国密教への関心と研究が必要であることを痛感しなければなりません、ということ事です。



## 第二、中国人の阿闍梨をつくる

### 阿闍梨とは何か

幸いに私は、中国人の僧侶の方々と三〇余年係わってきました。僧侶たちもバブル経済の中で仏教の復興と係わっています。仏教寺院では伽藍が立派に整備され、仏教行事も行うことが出来ます。密教の復興もその中で出てきた問題です。現場で見てください。

まず問題なのは、密教の思想の研究は、国際学会で進むようになりました。しかし「宗教としての唐代密教とは何か」の基本が、政治関係者も僧侶もわからないのです。

仏教の救いは「瞑想」にあります。瞑想によって自分の心を見つめ、「煩惱」(囚われ)から離れていくのです。それが修行です。禅宗は「坐禅」をすることです。理屈は一切なし。只管打座しかんだざと言ってただただ坐禅をすることです。浄土宗は「南無阿弥陀仏」を一心に唱える。阿弥陀仏への信心の深さで自分の心を見つめていくのです。

密教の瞑想とはどのような事でしょうか。それは「三密行」さんみつぎょうを行うことです。行者(われわれ)の三密「身体と言葉と心」の三つを用いて、自分が仏であることに気づくことです。具体的には、身体(手)に印(仏の身体のこと)を結んで。言葉は仏の言葉(眞言)を唱える。つまり「手に印を結び、口に眞言を唱え、心に仏の心が入る」と観想するのである。

密教の修行とは、この三密行を阿闍梨から授かり、行ずることです。阿闍梨から授からず、個人で勝手にすることは許されません。阿闍梨を介しない密教の法の継承はあり得ません。インドにおいても、チベットにおいても、日本においても阿闍梨から伝授を受けない修行は修行ではありません。だが八四五年の武宗の破仏以後、千年以上中国

人の阿闍梨がいなくなったのです。

ところが、密教に興味が出てきた現代、勝手に「自分は唐密の阿闍梨である」という、僧が現れ始めました。日本では麻原彰晃がオーム真理教という密教まがいの集団を創りましたことは、御存じでしょう。現代中国において、自称阿闍梨を名乗りオーム真理教よりはるかに大きな密教宗団が現れ活動を始めたのです。

さらに密教に興味を持つ個人が、自分のアパートの一室で勝手に「護摩」を焚く者も現れ始めました。大変な現実となりました。

### 中国人の阿闍梨をつくる

ここで弘法大師空海に登場していただかねばなりません。高野山は、唐代密教復興と係わる必要があるのです。

中国において、仏教の現状、密教の復興をここまで話すと、中国側との関係において、日本側にも色々な問題があります。まず中国の仏教の現状に関心をもたない、日本の仏教界も問題でしょう。またテレビ、新聞等の報道機関が、中国仏教について、その現場を報道したことを私は知りません。時々チャラツと出ている報道も全く意味をなしていない。どの報道機関も仏教の現場をとらえていない。報道機関が専門家を抱えていないからでしょう。

中国本土における密教の現状について、気づいている中国僧も居るのです。揚州・大明寺方丈能修法師、西安・大興善寺、青龍寺方丈寛旭法師は、高野山に來ました。新たな気持で高野山金剛峯寺において得度（僧侶になる儀式）をし、加行（密教の三密行を百日間する行）をし、阿闍梨になる儀式・伝法灌頂を受け阿闍梨となつて、中国に帰りました。また能修法師の弟子仁如法師は、高野山で一年間の厳しい修行をして大明寺に帰りました。

中国の僧が高野山で行をすると十五キロから二〇キロは痩せます。そして中国に帰るので、皆々修行して阿闍梨に

なってきたことに納得します。口での説明はいいらないのです。

さらに高野山大学には、密教に関心を持つ中国人学生が学んでおります。今後の正しい唐密の阿闍梨養成は、期待できるでしょう。

### 第三、密教の道場を造る

密教の僧侶が活動するには、密教のお寺、密教の伽藍が必要です。密教の拝み方、修行には、道場が必要です。密壇、護摩を焚くには護摩壇、三鈷、五鈷等の仏具。曼荼羅、大日如来、不動明王等の多くの仏像・仏画。密教僧の衣の数々。密教僧の声明等の音楽等々。まさに密教は、総合芸術なのです。一般の仏教とは違う所です。

今、中国では、密教道場に関心を持ち、密教道場を造ろうとしている寺があります。日本のパンフレット等を参考にしているようです。阿闍梨がないので、道場がどのように使用されるのかがわからないのです。だがお金があるので豪華なものを造るのです。もったいなく思います。だから日本の密教僧が指導してあげることが必要なのです。私は、中国で二か所の密教道場の建設と係わっています。

一つは、揚州・大明寺に「密厳院」という道場を造っています。大明寺に阿闍梨が出来たからです。中国人の設計士、仏師、大工等を高野山に来てもらって、高野山で色々な建築、仏具、仏像仏画等を見てもらっています。現在、密教に必要な仏具、仏像等は、すでに中国で造られているのです。これも驚きです。

さらに密教復興に必要なのは、資料です。中国には、唐密の資料がありません。これは学問としての復興に必要なのですが、私は、自分の集めてきた密教の資料を全て大明寺「密厳院」に寄付することとしました。密教復興に役立っていただくためです。「密厳院」には「静慈圓密教研究室」があります。

今一つは、河南省・妙楽寺と係わっています。現地は田舎で広々とした平地に塔だけがぼつんとありました。中国に伝わった釈尊の舍利しり十九か所の内、十五番目と記される妙楽寺舍利塔があります。中国政府から、国家級の文化遺産に指定されています。この塔を中心に、妙楽寺は現在復興中です。大雄宝殿、仏法殿、多宝閣を中心に、文殊殿、普賢殿、観音殿等の主要建築群の建物は、ほぼ完成しています。

妙楽寺は、寺院の復興だけではありません。妙楽寺を中心に、妙楽寺遺跡公園を造る。隋唐風の街並みを造る。寺の周囲に生態林の森を造る。農業地を開拓して農民を住まわせる。堀をつくって船を浮かべる等の構想です。大テーマパーク構想を聞かされました。

妙楽寺の住職釋延琳法師が、高野山の清涼院に私を訪ねて来ました。延琳法師が高野山に訪ねてきたのは、「密教の伽藍」を造りたいとのことでした。密教伽藍構想の依頼を受けたのです。現在釋延琳法師と行き来しながら考えているところです。そこに今回の新型コロナウイルスが発生しました。休息です。

### おわりに

今回は、「東アジアにおける異文化理解と受容の諸相」です。東アジアの中で日本列島を意識すると、日本の歴史の夜明け、日本の文化の根底には、第一に漢字文化が基本であるということ、論を俟たないところでしょう。すると漢字の中心である中国の歴史と日本列島の関係は、これまた避けては通れないところでしょう。

中でも過去において遣隋使・遣唐使が日本にもたらした文化は、日本の歴史を知る必須の資料であります。仏教もその流れの中で育ってきました。



弘法大師空海の思想を「密教」と言いますが、密教とは、空海の仏教観であります。空海独自の仏教解釈が生まれたのです。その原因は経典にあります。空海は、仏教解釈を『大日経』と『金剛頂経』を中心にしました。これが他の僧侶との仏教解釈の違いになりました。

さらに言えば、空海は入唐して『金剛頂経』系関係の経典を精力的に集めて、持ち帰りました。当時『金剛頂経』系の経典は、日本に将来されていませんでした。ただ空海だけが持っていたのです。だから独自の解釈が出来たのです。それだけのことです。

今回の「異文化理解と受容」の問題を、中国との関係において、仏教・密教・空海をテーマにして、私の経験から話しました。

私が主張したいことを、今一度まとめると、「歴史は常に、動いている」ということです。

百年後の未来を、今私が「未来」の単語で話しても、百年後は「私がいま話している現実」は、それは過去のことなのです。

ここに私は、「異文化理解と受容」のテーマで、大切なことを提案していると思っております。それは、現代の日本人が、政治家、仏教者共に、現代の中国における「仏教の現場」を全く理解しようとしていないことです。しかし大方の日本人は、知っているつもりでいます。「テレビでこのように話していた」「新聞にこう書いていた」との理解です。だから、私がお話しした今回の話しは、理解していただけないと思っております。私にとっては、この現実が問題なのです。

五十年前の中国とは違い、現代の中国はアメリカと張り合う、経済大国となりました。

世界は、経済においても、科学技術においても、教育においても、仏教においても中国を無視できません。

私の五十年余の中国との交流において、私自身が気づかされたことがあります。それはやはり一般的な事ですが、相手を知ろうとする態度です。そして現場を経験することです。現場の人々と付き合うこと、そして現場を正しく理解しようとする態度は大事です。

日本列島では、いま新型コロナウイルスが蔓延しております。これは日本列島だけの問題ではなく、世界的な問題です。この現実を日本の報道がどう伝えているのかは、興味あるところです。日本流とは、何なのでしょね。